

Cappella Accademica

第52回 定期演奏会



エステルハージ宮殿

2022年10月29日（土） 13:30開場 14:00開演

浜松市福祉交流センター ホール

主催：カペラ・アカデミカ

助成元：（公財）静岡県西部しんきん地域振興財団、公益信託チヨタ遠越準一文化振興基金

後援：浜松市、（公財）浜松市文化振興財団、静岡新聞社・静岡放送、中日新聞東海本社

ホール内客席では携帯電話など全ての電子機器の電源をお切りください

御挨拶

本日は、カペラ・アカデミカの第52回定期演奏会にご来場戴き有難うございます。

カペラ・アカデミカは、昭和49年（1974年）創立以来浜松、豊橋両市を拠点に、バッハ、ヘンデル、コレッリ等のバロック音楽を主たるレパートリーとし、時折モーツァルト、ハイドン等の初期古典派の作品を加えて、演奏会を開催してまいりました。昭和49年（1974年）9月2日に故濱田徳昭先生のご指導により初練習を開始してから今年で48年となります。48年間もの長き年月にわたり活動できましたのもひとえに皆様の暖かい御支援の賜物と心より感謝しております。今後とも音楽を通じて遠州・東三河の三遠南信文化交流のお役に立てることを切に願っております。

今回のプログラムは、バロック時代（16世紀末から17世紀初頭）を代表するヴィヴァルディ、マンフレディーニ、テレマンの作品、18世紀のヨーロッパを代表するフルート奏者で作曲家のクヴァンツ、それから交響曲の父と言われるハイドンの作品を取り上げて見ました。

音楽史的に見ますとヴィヴァルディ、マンフレディーニはバロック時代、テレマンはその作風は多様で、一口では言えませんが、あえて簡単に言えばバロック時代と古典音楽の中間に位置しておりクヴァンツ同様ギャラント様式時代の作曲家と言えます。バロック時代は音楽の父バッハ没（1750年）に終焉したと言われ、その後古典時代に活躍したハイドン、モーツァルトの時代に移っていきます。

本日はその音楽の流れを少しでも感じて、楽しんでいただければ幸いに存じます。

カペラ・アカデミカ団員一同

出 演 者

カペラ・アカデミカ

浜松と豊橋在住の専門家、アマチュアにより結成された室内合奏団で、今は亡きバロック音楽の大家で現天皇陛下が師事された故濱田徳昭先生により命名され、1974年（昭和49年）9月2日に誕生しました。濱田先生のもとで主に宗教曲の演奏法などを学び、その後合奏団独自の定期演奏会を年2回及びその他の演奏会を2～3回開催し、室内アンサンブルのインティメイトな世界を創り上げることを目標としています。

<u>1st Violin</u>	<u>2nd Violin</u>	<u>Viola</u>	<u>Cello</u>	<u>Double bass</u>	<u>Harpicord</u>
今井 重人	磯貝 ゆり	木下 正明	近藤 宏司	小林 哲	釘本 眞理
◎釘本 英範	末田 良	小林はる奈	佐藤 隆行	早川 浩一	
永井 正子	宮崎 秀生	船山 敏	篠塚 正啓		
林 明子	村上 香織		浜島 吉男		
	山中 哲				
<u>Flute</u>	<u>Oboe</u>	<u>Bassoon</u>	<u>Trumpet</u>	<u>Horn</u>	
田代 眞理	大橋 弥生	斎藤 善彦	岡部比呂男	佐藤 博子	
続 眞樹	佐藤妃南乃		福田 徳久	末永雄一郎	

◎はコンサート・マスター

指 揮：吉川 紀彦

曲目解説

■アントニオ・ヴィヴァルディ (1678～1741): 合奏協奏曲 RV569 ヘ長調

ヴィヴァルディは、ヴェネツィア出身のバロック音楽後期の著名な作曲家の一人、ヴァイオリニスト、ピエタ院の音楽教師、カトリック教会の司祭、興行師、劇場支配人でもあり、多数の協奏曲の他、室内楽、オペラ、宗教音楽等を作曲しました。今日演奏する別名2つのオーボエ、2つのホルン、ファゴット、ヴァイオリンの為の協奏曲の作曲年代は不明ですが、通常「協奏曲（コンチェルト）」といえ、独奏楽器とオーケストラのための作品を指します。《四季》を初め、約350曲もの協奏曲を書いただけでなく、独奏楽器による華麗なソロと、弦楽オーケストラによる力強い総奏（トゥッティ）が交代するという協奏曲の形式を整え、バッハなどの音楽家の模範となったことで、「協奏曲の父」とも呼ばれています。ヴァイオリン協奏曲ではヴァイオリンのテクニックの可能性をとことん追求しましたが、今日演奏する曲ではそのような華やかな技巧はひかえめで、ヴァイオリン本来の歌謡性を全面に出したような曲となっています。2楽章はパストラレ風でどこか牧歌的な性格の流れ、3楽章は開放的で速いアレグロ、と魅力いっぱいの曲です。

第1楽章：アレグロ、第2楽章：アダージョ、第3楽章：アレグロ

■ヨハン・ヨアヒム・クヴァンツ (1697～1773): 2つのフルートの為の協奏曲 ト短調 QV.6:8

クヴァンツは、ハノーファー近郊のオーバーシェーデンに生まれました。町楽師として主にヴァイオリン、オーボエ、トランペットを習得し、クラヴィーアをキーゼヴェッターに、対位法をゼレンカとガスパリーニに、演奏法をピゼンデルに、トラヴェルソをビュファルダンに師事しました。ポーランド王室楽団を経てプロイセン王室楽長兼フリードリヒ2世専属フルート教師となり、著書に「フルート奏法試論」があります。クヴァンツの作品は、プロイセン王のロココ趣味を反映したギャラント様式で書かれた300曲のフルート協奏曲、約200曲のフルートを含む室内楽曲や無伴奏曲があり、今日でも演奏されています。ギャラント様式は、多くの点でバロック様式のけげげげさへの反発であり、バロック音楽にくらべると、より素朴で、ごてごてと飾り立てておらず、流麗な主旋律の重視に伴い、楽節構造の軽減や和声法の抑制といった特徴があります。今日演奏する曲にも同じことが言えます。

第1楽章：アレグロ、第2楽章：アモローサ、第3楽章：プレスト

~~~~~休憩 15 分間~~~~~

### ■フランチェスコ・マンフレディーニ (1684～1762): 2つのトランペットの為の協奏曲 二長調

マンフレディーニはイタリア後期バロック音楽の作曲家・ヴァイオリニスト・教会音楽家です。トスカーナ地方ピストイアの出身で、ボローニャでジュゼッペ・トレッリにヴァイオリンを師事し、職業演奏家としてデビューしました。ボローニャで要職を得、郷里で聖フィリッポ大聖堂の終身音楽監督に就任しました。作品の殆どは死後に破毀されたと推定されており、わずかに43曲の出版作品と、一握りの手稿譜が現存するにすぎません。オラトリオも作曲したことが知られているものの、今日演奏されるのは器楽曲だけです。とりわけ合奏協奏曲やシンフォニアは、創造力や着想力の豊かさを物語っています。一般には作品3に含まれる「クリスマス協奏曲」で知られています。

第1楽章：アレグロ、第2楽章：ラルゴ、第3楽章：アレグロ

## ■ゲオルグ・フィリップ・テレマン 1681～1767) : 組曲 ニ長調 TWV 5 5 : D21

テレマンはドイツ東部のマクデブルクの中流の家庭に生まれ、生前はバッハやヘンデルにまさる名声を博したテレマンも、バロックから古典へと大きく移り変わる時代の流れに抗しきれず、その作品は死後久しく忘れられる運命に有りました。しかし、20世紀初頭、ロマン・ロラン等の偉大な音楽学者が彼を再発見して以来、テレマンの作品は多くの人々の注目を集めるようになりました。特に第二次世界大戦後のテレマンの復興は目覚ましく、「ロマン・ロラン曰く、彼が忘れられた巨匠であった時代は、すでに過ぎ去ったのである」と、86年の長い生涯の間に、テレマンは当時のあらゆる分野にまたがる無数の作品を生み出しましたが、器楽曲の領域で彼独自の様式を最も豊かに発展させたのは、ソナタと並んで、600曲に及ぶ管弦楽組曲においてでした。当時の管弦楽組曲は、フランスの宮廷オペラや宮廷バレエで用いられたフランス風序曲のあとにさまざまなタイプの舞曲を連ねたもので、鍵盤楽器の組曲とは違って、舞曲の種類や配列には一定の形が有りませんでした。元来フランス、特にルイ14世の宮廷に起こりましたが、フランスの宮廷文化を理想としたドイツの貴族や領主の宮廷を背景に、ドイツの作曲家たちがそれを大いに発展させました。バッハも4曲ないし5曲の管弦楽組曲は、その最も有名な例です。今日演奏する組曲はご多分に漏れずこのフランス様式を基調としながら、イタリア音楽の旋律法や協奏曲様式を取り入れ、国際派の作曲家らしい多彩な音楽を作り出しています。ここでは独奏ホルン（狩猟ホルン）が協奏曲のように活躍し、見事な演奏効果を発揮しています。

第1組曲：序曲、第2組曲：不平、第3組曲：喜び、第4組曲：カリヨン、第5組曲：騒音  
第6組曲：ルール（舞曲で遅いジグ）、第7曲：メヌエット

## ■フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (1732～1809) 交響曲第8番「夜」ト長調 Hob. I:8

ハイドンはモーツァルト・ベートーヴェンと並んでウィーン古典派と呼ばれていますが、後世最も影響を与えた作曲家で、バロック時代の終わりに誕生し、古典派時代を牽引して、フランス革命でナポレオンがウィーンを占領する中で亡くなりました。ハイドンが生まれた頃のウィーンは皇帝カール6世が君臨し、バロック時代として豪華絢爛な音楽や建築物が作られました。ハイドンはウィーンにやってきた1740年に神聖ローマ皇帝カール6世が亡くなります。その後を継いだのが女帝マリア・テレジアですが、マリア・テレジアは外国からの圧力や国内の財政問題の為に音楽にかかる予算を削減します。これは何を意味するかというと豪華絢爛なバロック時代が終わったことを意味します。バロック時代が終わり、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンを代表する古典派の時代がやってくるわけです。ハイドンは一時定職にはつかず不安定な生活を送り悲惨な生活を送っていたようですが、若かったハイドンは悲惨な生活を物ともせず全ての時間を音楽に費やし、演奏をしては空いた時間で作曲の勉強をしました。そんなハイドンは1759年になって初めて定職に就きます。ハイドンはウィーンでモルツィン伯の楽長に就任しますが、しかし、この伯爵は浪費が激しく、資金不足から楽団が直ぐに解散させられる事になります。この時に作曲した交響曲を気に入ってくれる人がいました。それがニコラウス・エステルハージ侯爵です。1761年にハイドンはウィーンからハンガリーで最も裕福な貴族エステルハージ家の屋敷に行くことになります。29歳頃から約30年に渡りエステルハージ家に仕え、ハイドンは副楽長として侯爵に仕えます。その時楽長だったヴェルナーは老齢だったため教会音楽以外の全権を任せられました。ハイドンはこの間、侯爵の要望に応じて作曲する事を義務付けられました。ハイドンが努めていた頃のオーケストラは10～15人程度（終わり頃でも20～25人）しかいなかったのですがこの副楽長時代に約26曲の交響曲を作曲し、中でも、三部作第6番「朝」、第7番「昼」、第8番「夜」や第31番「ホルン信号」を作曲しました。今日演奏するのはこの時代の「夜」です。この三部作の中で唯一第8番の終楽章に「嵐」という具体的な表題を持ち、ハイドンの描写手法が存分発揮されています。

第1楽章：アレグロ・モルト、第2楽章：アンダンテ、第3楽章：メヌエット、第4楽章：「嵐」プレスト